

氏名	高 田 宏 美
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 4 6 4 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和46年 6 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学 位 論 文 題 目	Bleomycin による肺障害に関する研究 第1編 Bleomycin 肺障害の臨床的観察について 第2編 実験的 Bleomycin 肺障害について 第3編 線維芽細胞抑制剤クロロキンおよびプレドニゾロン による Bleomycin 肺障害の抑制について
論 文 審 査 委 員	教授 小坂 淳 夫 教授 大 藤 真 教授 山 崎 英 正

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

Bleomycin (BLM) 肺障害解明のため臨床的観察，実験的 BLM 肺障害の作成及びその抑制実験を試みた。

第1編では教室入院の BLM 使用者65例につき観察し，8例に肺障害を認めた。49才以下の若年者には認められない。自覚症としては咳嗽，喀痰，呼吸困難等があり，体液因子では α_1 -acid glycoprotein, fibrinogen が高値をとる傾向にある。胸部レ線写真では索状乃至斑状影を主とするもの6例と線維性網状影を主とするもの2例に大別した。又既往に肺病変のあるもの，前後に他制癌剤を使用したもの或は悪性リンパ腫等では発生率が高い傾向がある。第2編では，マウスおよび家兎に最初に BLM による肺障害を惹起させることに成功した。その組織所見は肺泡中隔の肥厚，胞隔の細胞浸潤，線維素の析出，細気管支上皮の増殖傾向等であり，初期には肋膜下に局限しており経過するに従い肺の深部へとびまん性に進展していく傾向が見られた。肺障害の発生機序としては，BLM の血管内皮に対する直接障害を考えている。第3編では BLM肺障害抑制のため，線維芽細胞抑制剤クロロキン或はプレドニゾロンを使用し良好な成績を得た。即ち BLM 単独投与例に比し，夫々の併用例共に肺泡中隔の肥厚は軽度で，foamy cell の出現や細胞浸潤も少く，肺構造は良好に保たれていた。即ち臨床上 BLM 使用に際してのクロロキン或はプレドニゾロン併用の意義を裏付ける成績を得た。

(3編共に昭和46年3月30日付発行 岡山医学会雑誌 第83巻，3，4号に掲載予定)

論文審査の結果の要旨

本研究は、新しく開発された抗癌剤 Bleomycin の副作用，とくに肺障害の実態とその発生機序を明かにし，さらにその予防処置についても検討を加えた，重要な知見を含む価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は，医学博士の学位を得る資格があると認める。